

栃木県における里山の文化的景観の地図化と地域資源としての活用

事業代表者 地域デザイン科学部・教授・高橋俊守

構 成 員 地域デザイン科学部・講師・鈴木富之

1. 事業の目的・意義

栃木県の里山には、美しい谷津田や棚田、並木や雑木林、清浄な小川、歴史的な城山や寺社等、豊かな自然と伝統的な土地利用に根ざした里山の景観が随所に残されている。しかし一方で、燃料革命や農林業の衰退、ライフスタイルの変化、諸施設の造成等に伴い、地域の暮らしの中で里山の位置付けが失われるとともに、管理放棄も進んでおり、里山景観は大きく変貌しつつある。

本研究では、栃木県における里山を文化的景観として捉え、地理情報システム（GIS）を用いて可視化する手法を研究開発する。さらに、里山の文化的景観を地域資源として活用し、地域で有機的につながることによって、若者から高齢者まで、異世代で活用することができる方策として、フットパスの手法に着目し、事例調査を実施する。

2. 研究方法

(1) 里山の文化的景観の可視化

文化財保護法によると、文化的景観とは「地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地で我が国民の生活又は生業の理解のため欠くことのできないもの」とされている。文化的景観は、日々の生活に根ざした身近な景観であるため、日頃その価値にはなかなか気付きにくい（文化庁）。

こうしたことから、文化的景観を地図上で可視化するためには、現存する地域景観の調査に加えて、地域景観の成立に寄与してきた人々の暮らしを明らかにすることが求められる。そこで本研究では、里山の景観を類型化するとともに、これらと地域住民の暮らしとの関係を、聞き取り調査から明らかにすることとした。視覚的に現存する景観と、地域住民の記憶の中にある景観を結びつけて整理し、GISを用いて地図上に可視化する方法

について検討を加えることとした。

(2) フットパスの事例調査

フットパス（footpath）は、イングランドにおいて土地の所有権とは無関係に人々が歩く権利「Rights of Way」として始まったもので、現在ではイギリス国内に網の目のように設置されている。イギリスのフットパスは、徒歩、馬、自転車、車等、移動手段に対応して幾つかの種類があるが、基本は歩くことを楽しむための道である。

近年、我が国においても、フットパスに発想を得て歩くための道を導入する取り組みが各地で行われるようになってきている。本研究では、これらの草分けとなる取り組みの一つである、町田市の多摩丘陵を主なフィールドとする、「NPO法人みどりのゆび」による活動に着目し、現地踏査と聞き取りを実施した。

3. 事業の進捗状況

(1) 里山の文化的景観の類型化と可視化

平成 26 年に栃木県佐野市閑馬地区において、農業、林業、大工、家事手伝いを生業とする 4 名の高齢者を対象に、聞き取り調査を実施した（高橋 未発表）。いずれの高齢者も、地域で生まれ育ち、地域の里山と深く関わりながら暮らしを営んできた。このため、里山の文化的景観に係わる知識や情報を多く聞き取ることができた。

ここでは、聞き取りの内容をテキスト化するとともに、キーワードを抽出して頻度分析を行った。用語の抽出には、フリーのテキストマイニングソフトウェア KH Coder を用いた。

高齢者の語りにおいては、現存する要素（例えば神社、寺、山林など）に加え、すでに現在の景観からは失われ、記憶の中にも残されている要素（例えば水車、農耕馬など）も多く含まれていた。記憶の中にも残された要素であっても、里

山景観の成り立ちを理解するためには大切な要素となるため、これらも景観に内包される文化的景観要素として記録の対象とした。表1に、聞き取りによって語られた、文化的景観要素に係わる主要な用語について整理した。さらに、図1に、対象地域における里山の景観構成要素の分布状況を図示した。

表1 里山の文化的景観要素概要（佐野市閑馬）

景観類型	文化的景観構成要素に係わる用語
山	地域信仰（山の神・箕輪山神社） 林業（植林、製材、丸太、ヒノキ、間伐、ソリ、木材、枝打ち、立木、林道、スギ） 山の恵み（栗、きのこ、山菜） 薪炭（雑木、炭、窯、炭焼き、まき、たきぎ、もや） 鳥獣（シカ、イノシシ、ヤマドリ）
川	流れ（沢、川） 水車（水車、粉） 魚介（ウナギ、シジミ）
農地	田（田、わら、縄、稲刈り、稲） 畑（たばこ、養蚕、野菜、蚕、かや、桑） 農作業（稲刈り、草刈り）
道	道（道路、峠、街道、旧道） 乗り物（自転車、車、バス、馬車、草履、トラック） 地域信仰（道祖神）
集落	家族（倅・長男、祖父・おじいさん、孫、弟、妻、妹、次男） 地域社会（地区、世話人、部落、家、実家、近所、結婚、町内、消防、老人、運動会、集会所、葬式） 学校（小学校、中学、高校） 地域信仰（神社、祭り、示現神社、当世話・宮世話、箕輪山神社、寺、神主、初午、薬師、太鼓、稲荷、屋台、祇園、檀家、坊さん、墓、注連縄、盆踊り） 食（米、酒、うどん、そば、赤飯、肉、麦、けんちん、ご馳走、柏餅、駄菓子、味噌、醤油、納豆、里芋、まんじゅう、羊羹） 家畜（馬、山羊、羊、牛、鶏、豚） 戦争（戦争、終戦、挺身隊、戦後、疎開）

※カッコ内の用語の並びは出現回数の多い順



図1 里山の文化的景観要素（佐野市閑馬）

※基盤図には2万5千分の1現存植生図を用いた。

(2) 町田市のフットパス

町田市には、市街地周縁部を中心として、昔ながらの里山風景、雑木林、田畑、古街道、歴史の面影などが随所に残されており、これらを繋ぐことにより、22のフットパスコースが設定されている（町田市）。これらのフットパスの実現は、多摩丘陵を中心にフットパス活動を実施してきた、NPO 法人みどりのゆびの貢献によるところが大きい。

そこで、実際に現地を踏査しながら、NPO 法人みどりのゆびの関係者から聞き取りを行った。このNPO 法人は2002年に設立され、フランスの小説家、モーリス・ドリュオンの童話「みどりのゆび」から、「みどりのゆびの精神を持って、ちょうどもどりのゆびを繋ぐように、多摩丘陵や日本の里山が美しい風景や緑に満ちた道で繋がって

くことを願って」団体名をつけたということである。

フットパスの実現には、地域住民の理解と協力が不可欠となることから、地域住民と連携しながら第1回多摩丘陵フットパスまつりを2003年に開催し、その後毎年この取り組みを継続している。フットパス基金も設けており、1口2000円で、寄付者は地図上で保全したい場所にシールを貼ることができ、この地図とあわせて自治体に寄付金をとどけるように工夫した仕組みとなっている。また、来訪者が活用できるように、鳥瞰図と案内が記載された「フットパスガイドマップ」(図2)を作成し、その売り上げを町田市の緑地保全基金に寄付する活動も実施している。

事務局長の神谷氏によると、フットパスの活動については、もともとは多摩丘陵の自然を保全する草の根の活動から始まったということである。今日では、地主を始め地元住民の協力を得て、地域の自然や文化に対する理解者を、地域内で増やすことに成功している。さらに、地域外への情報発信を通じて、活動への理解者を徐々に増やしており、近隣自治体の川崎市や、トヨタ自動車、東京ガス、小田急電鉄等の企業、東京農業大学等の学識者・研究者らが協力するようになっている。多くのステークホルダーを巻き込んで、まちづくり、地域づくりへと発展し、フットパスを町田市



図2 フットパスガイドマップ

※これまでに3冊発行され、それぞれ6~12コースのフットパスが掲載されている。

の特色ある取り組みとして位置づけることに成功したと言える。一方では、2009年に日本フットパス協会を設立し、その設立記念シンポジウムを町田市で開催するなど、フットパスが全国各地に広がる契機にもなっている。



図3 みどりのゆびによって整備された緑地と案内表示



図4 フットパスの拠点として活用されている小野路里山交流館

2013年9月には、フットパスの拠点となる小野路里山交流館が設置された。設置場所となった小野路は、江戸時代の宿場があったところで、交流館の建物は、かつての名主の家を旅籠として使用していたところを、往時の面影をできるだけ残す形で交流館として復元したものであるそうだ。施設の運営管理をされている山崎理事長によると、開館からこれまでに3万6千人の来館者があったという。当初から、1日20人の来館者を目標としていたというから、目標は十分に達成されている。この交流館の運営には、地元の農家11軒が協力し、農産物は地元でとれたものを用いており、昼食や農産加工品として販売している。筆者らが訪問した際にも(2017年3月)、フットパスの途中に立ち寄ったと思われる、ザックを持った複数の訪問者が見られた。またこの施設では、フットパスの拠点としての利用の他、うどんうちの体験教室などの行事も行われている。このように訪問者が立ち寄ることができる新たな拠点形成も、フットパスの魅力を高めることに大いに貢献していると言えるだろう。

4. 事業の成果

本研究によって、栃木県における里山景観を、文化的景観の視点から考察し、聞き取り調査により景観構成要素を類型化するとともに、GISを用いて地図上で可視化することができた。今日では、地域の暮らしと里山との係わりが失われつつあり、里山の文化的景観構成要素の多くも風化しつつある。このため、里山の文化的景観構成要素を明らかにするには、特に、里山で生業を営んできた、高齢者を対象とした聞き取り調査が重要な役割を果たすことを示した。

一方で、聞き取り調査から明らかにされた文化的景観構成要素を地図上に示すには、現存するものに加え、すでに失われた要素を図化することが求められる。さらなる聞き取り調査を行えば、地図上に詳細な分布を示すことができるかもしれないが、多くの労力を要する。そこで本研究では、景観を類型化し、これらに関連づける方法で図化

する手法を採用した。こうした方法で、文化的景観の分布概要を表現することはできると考えられる。ただし、文化的景観を地域資源として活用し、実際にフットパスを適用しようとする際には、改めて現地を歩いて確認できるスケールで情報が求められる。本手法は、このための糸口を与える地域情報データベースとしても活用できるだろう。

フットパスを実現させるためには、ごく当たり前で身近な里山景観の価値について、地域住民の気づきが求められる。また、外部からの訪問者が、フットパスの魅力を感じるには、地域での暮らしや里山景観の成り立ちについて、ある程度の知識を得ることも効果があるだろう。いずれにしても、その地域の里山景観やフットパスに魅力を感じてやって来る来訪者が多くいれば、現実に地域が再評価されたことを、地域住民が実感することができる。こうして、地域住民が地域の里山景観や暮らしに誇りと愛着を持つようになると、フットパスの取り組みもより活性化され、協働も促されて、好循環が生じるのではないだろうか。多摩丘陵をフィールドとした「NPO 法人みどりのゆび」の取り組みを実際に見聞きして、フットパスの設置に際しては、地域住民の理解と協力、そして主体的な参加を引き出すことが基本的に重視されていることが改めて確認できた。

5. 今後の展望

本事業は、栃木県の里山をフィールドとして、文化的景観要素を地域資源として活用するための手法を開発することを目標としている。今後は、得られた知見を実際に地域住民に還元し、諸課題を明らかにする応用研究を実施するとともに、他地区における里山景観への適用や、フットパス以外の文化的景観の活用方法についても模索したい。

謝辞

聞き取り調査にご協力いただいた、佐野市閑馬地区の住民の皆様、現地を懇切丁寧にご案内いただいた NPO 法人みどりのゆびの神谷由紀子氏、尾留川朗氏に厚く御礼申し上げます。